比企城館跡群小倉城跡発掘調査指導委員会会議録

会議の名称	令和８年度第１回比企城館跡群小倉城跡発掘調査指導委員会
主な議題	令和８年度発掘調査箇所(郭２)現地視察
開催日時	令和８年６月５日（木）　午後１４時００分～午後１６時３０分
開催場所	小倉城跡郭２
会議録の公開(非公開・一部非公開）とその理由	全部公開
出席委員	落合義明委員長、宮田毅委員、橋口定志委員、田中信委員、
オブザーバー	埼玉県教育局教育総務部文化財・博物館課主任　青笹基史
事務局	生涯学習課主幹　田中和浩、専門員　石川安司、生涯学習課主任　儘田めぐみ
記録方法	要点筆記

【審議等内容又は概要】

１　開会

生涯学習課主任　儘田めぐみ

２　あいさつ

比企城館跡群小倉城跡調査指導委員会委員長　落合義明

生涯学習課主幹　田中和浩

３　議題

（１）現地視察

令和７年度(調査期間：令和８年２月１２日～令和８年６月３０日)発掘調査箇所

・郭２第６トレンチの現地確認

・郭２第１２トレンチの現地確認(推定櫓台)

（２）議事今次調査の現況評価と今後の調査方針(玉川公民館)

司会進行　落合委員長

【第６トレンチについて】(小倉城跡廓２－６トレンチ図面、廓２遺構全体図参照)

［事務局］前回の調査で鉄釘がトレンチの一番下のレベルから三本ほど出てきていることもあるので、建物があるということが前提にあり、柱穴を探すという目的を持って調査をすすめている。トレンチの幅も柱穴を探すために１間(約１８０㎝)を想定して２ｍ幅に拡張して掘っている。柱穴の可能性がある箇所は現在のところ１箇所のみ。一番下のレベルまで下げれば出てくるのではないかと思うが、少しずつ面的に広げながら遺構確認を行っている。トレンチ東側の岩盤が切れたところで対になって石列が検出され、これが礎石であることも考えて石列の上の高さで遺構確認を進めている。この高さで遺物が多く出土している。遺物については、かわらけ、鉄釘、薄手の擂鉢、天目のほか、推定虎口付近の第７トレン

チと同一個体の可能性がある信楽壺片や14世紀の灰釉瓶子がでてきている。第６，第７トレンチは同じ時期くらいに埋められたと考えている。

推定虎口（第７トレンチ）と第９トレンチに硬化面がでていたので推定櫓台へ向かって通路があり、(第６トレンチがある)郭の北西側に建物があったと想定している。

［委員］遺物は（埋められたのではなく）第６トレンチから推定虎口（第７トレンチ）の方へ流れたということが想定できる。土の流れが分かれば（廓２の）中心部分がわかる。第６トレンチの箇所が（廓２の）中核になると逆に論理づけられる。出土した信楽が（推定虎口の第７トレンチで出土したものと）同一個体であれば面白い。傾斜があると(土や遺物は)下へ流れていく。土が流れる方向は、あれだけ土塁で囲まれているとすると虎口のところしかない。推定虎口が一番低く、そこへ物が流れていく。(したがって第７トレンチの箇所が推定ではなく)虎口で良いのではないかと思う。そういう意味でも信楽が同一個体であればベストである。

［委員］石列の間に石があったとおもうがトレンチ方向に並んでいたらと思う。丸い石が気になる。列でならんでいるとしたら意図的である。

［委員］サブトレを入れて下を見た方が良い。石が浮いているのか。サブトレンチを入れて石列の下の状況を把握した方が次の調査につながる。今の段階であの位置で礎石かどうか判断できないが、上に遺物がかぶっているので元位置でなくとも近い位置だと思う。

［委員］(第６トレンチがある郭の北西側に建物があったと想定していることについて)　狭い尾根筋だと尾根の平場の片方によせて建物を建てることがよくある。名胡桃が例としてある。

【第１２トレンチ(推定櫓台について)】(第１２トレンチ平面図、廓２遺構全体図参照)

①第１２トレンチ(推定櫓台及び斜面)平場について

［事務局］調査開始当初は、少し掘り下げたところで地山の岩盤面が出てくると考えていたが、現在のところ岩盤面は確認できていない。事前に確認したように岩盤面は第１２トレンチの表土より約５m程下にある可能性がある。昨年度調査の第１トレンチ東端で岩盤面が確認されており、岩盤面はその高さから緩やかに第１２トレンチの方向へ上に向かって傾斜し、この平場は盛土によって造成されている可能性があると考えている。第１２トレンチは、表土下５㎝で面的に際まで掘削したところ、資料の黒１点鎖線の範囲(第１面)で１～３㎝程度の砕石が混ざる状況がみられた。そこで、十字ベルトの中央にサブトレンチを入れ、表土下１０㎝のところで５～１０㎝の礫が敷き詰められている状況を確認した。この面の範囲を確認するため、全体的に面的に掘り下げて調査をおこない、資料の赤１点鎖線の第２面となる集石の範囲を確認した。第１面の集石範囲を見ると、塁線を意識しているようにもみえる。第２面は一部に硬化面が見られたので、そこは掘削せずに残してあるが、この下に礫がある可能性がある。この硬化面を掘り下げて良いか。この集石遺構は建物の地業である可能性も考えている。現在のところ柱穴は確認されていない。また、塁線側に柵列の柱穴も想定していたが現在のところ確認されていない。塁線側の土はさほど硬くないが、塁線を保っていることも不思議である。

［委員］今の時点で盛土していると考えない方がよい。集石の広がりはどこかでとまりそうだが、どこでとまるのか。(集石の有無を確認するために硬化面を剥がす際には)　硬化面の範囲は落として(記録して)おいたほうがよい。

［委員］　集石がみられない塁線側では礫が潜り込んでいる可能性もある。また、岩盤面の確認のために、期間を考慮すると、十字ベルト沿いにサブトレを入れて確認するのがよい。

［委員］建物が無い場合、土塁・柵列があるかを考える。玉縄城跡の柱穴は１間(約１８０㎝)である。それを意識するとよい。

［委員］(集石について)岩石を捨てる場所か。(塁線側に)柵を入れるために泥をいれているのか。築城のときに岩石の破片がでてくる。それを捨てる場所、そこに集中させて高台にしているのでは。廓外側の崖際の方に土があるのは柵を打ち込むとしたら岩盤では無理なので意図的に周辺に泥を入れて柵を打ち込めるようにしているということもあるのではないかと思う。現場を見た限りでは廓(内)側のほうには砕石があって、土を入っていない。縁辺部に土が入っているということは意図的に柵を打ち込むためにやっているのではないかとおもう。岩盤を溝状に掘ったところに柵を建てて埋めて固める。土(だけ)を積むと引っぱったときに崩れる。それでたぶん地業状に砕石を入れたのではないか。あれだけ崩れていないということはただの土だけではなく(砕石を入れて)しっかりやっている。ただ杭を打ち込める程度の石の入れ方なのかもしれない。

［委員］トレンチをいれればわかる。金山城では柵を溝状に掘ってはいないが個々に岩盤を３０センチ程度掘り込んでいる。その上に多少土がある。あの(小倉城の)片岩を上から掘るということが可能かどうか。金山城は凝灰岩なのでできる。

［委員］玉縄城の場合は、後北条氏が田名村(相模原市)に出した１５６３年6月１０日付の北条家朱印状に(柵に使う)柱の本数や縄の長さまでてくる。後北条氏のあの規定は意味がある。石混じりの赤土を使ってという指示まで書かれている。

②第１２トレンチ斜面について

［事務局］昨年調査した第１トレンチの東端と同様に砕石をはりつけた土留のような状況がみられる。まだ下に砕石が潜り込んでいる(オリジナル面がある)可能性がある。

［委員］　サブトレをしっかり入れて確認したほうがよい。

(2)その他

［オブザーバー］

保存活用計画をいつ頃だすのか。そのためにどこまで調査をするのか。そのためには何が明らかにならなければいけないのか。事務局側で考え、委員に相談してもらいたい。ゴールを示してもらいたい。

［委員］秋からの調査前に委員会を開き、町としてどうしていきたいのかを出してもらい、それを念頭に今後の調査を押さえなおしたい。

４　閉会　　生涯学習課主任　儘田

その他審議会等の長が必要と認めた事項	配布資料 ・次第 ・第６トレンチ平面図、　第１２トレンチ平面図、郭２遺構全体図

上記内容について、相違ないことを証します。